

源俊頼の和歌と短連歌

大野 順子

要旨 源俊頼が自らの編んだ『金葉和歌集』に勅撰集で初めて連歌の部を設定したことは、歴代勅撰集の編纂史上において極めて異例の出来事であった。俊頼は自らの著した『散木奇歌集』や『俊頼髓脳』に多くの連歌作品を取りこんでいることから明かなように、和歌に比べて一段低く見られがちな「連歌」という形式に対して強い関心を抱いていた歌人である。その俊頼が自らが編者を務める暗の歌集に「連歌」という呼称を置いたということは、和歌と連歌とを完全に同等と認めるまではいかずとも、短連歌が和歌という第一文芸に、より接近する表現形式へと成熟していたと考えていたことを示すであろう。

これまで俊頼の短連歌を研究するにおいては、掛詞（秀句）や縁語といった和歌と共通するレトリックを用いつつも、短連歌が和歌とどれほど異なる表現形式として新たに発達・展開していったかということに力点が置かれていて、和歌との親和性についてはあまり論じられてこなかったように思う。確かに、俊頼作の短連歌や彼が収集した連歌を調査してみると、何らかの「本」があったと考えられる作品はそれほど多くないが、それらの作品を分析していくとある特徴の認められる一群が存在した。

そこで本稿では、俊頼が先行和歌から短連歌へと何を取り入れていったのか、この期の短連歌の有り様について従来とは異なる視点から捉え直していくものである。

はじめに

源俊賴が自らの編んだ『金葉和歌集』に勅撰集で初めて連歌の部を設定したことは、歴代勅撰集の編纂史上において極めて異例の出来事であったといえよう。俊賴はそもそも自らの著した『散木奇歌集』や『俊賴髓腦』に多くの連歌作品を取りこんでいることから明かなように、和歌に比べて一段低く見られがちな「連歌」という形式に対して強い関心を抱いていた歌人である。その俊賴が自らが編者を務める晴の歌集に「連歌」という呼称の文芸を置いたといふことは、和歌と連歌とを完全に同等と認めるまではいかずとも、短連歌が和歌という第一文芸に、より接近する表現形式へと成熟していたと考えていたことを示すのではなからうか。稲田利徳氏は、俊賴が『金葉集』中に連歌の部を設けたのは従来価値の低いものとされてきた連歌を和歌と同列の位置に引きあげようとする意図があったことを指摘し、その背景には「三代集的な歌材、歌語の行き詰まり」といった和歌への危機意識があったことを述べている。⁽¹⁾この点について異論はなく、本稿ではそれに加えて新たな視点からこの期の連歌と和歌の関係について解明したいと考えている。

これまで俊賴の短連歌の研究は、掛詞(秀句)や縁語といった和歌と共通するレトリックを用いつつも、短連歌が和歌とどれほど異なる表現形式として新たに発達・展開していったかということに力点が置かれていて、和歌との親和性についてはあまり論じられてこなかったように思う。⁽²⁾

木工助敦隆がのりたる馬の、ことのほかにやせよわくしておそかりければ、おくれたりけるをまちつけてい

かにととへば 敦隆

ほねあがりすぢさへたかきこまなれや

つく

ひにゆくことはしりへしぞにき〔散木奇歌集〕一五七五

穆王八駿天馬駒、後人愛之写為図、背如竜合頸如象、骨竦筋高脂肉壯、日行万里速如飛、

〔百氏文集〕諷論四新樂府三十首「八駿図」

関根慶子氏は右の連歌と漢詩を例にとつて典拠をもつ連歌は現存資料中には稀であることを論じ、さらに「思うに当時の連歌が軽妙な座興を楽しんだに過ぎない所から、深い典拠などは自然用いられなかつたのであろう。現存する資料が乏しいばかりではなさそうに思われる。」⁽³⁾とも述べている。確かに、俊頼作の短連歌や彼が収集した連歌を調査してみると、何らかの「本」があつたと考えられる作品はそれほど多くない。しかし実例は少ないながら、それらの作品を分析していくとある特徴の認められる一群が存在した。そこで本稿では、俊頼が先行和歌から短連歌へと何を取り入れていったのか、この期の短連歌の有り様につき、従来とは異なる視点から捉え直してみたい。

一、俊頼詠の連歌にあらわれる古歌

本節では、まず俊頼の詠んだ連歌の句に先行和歌が利用されていると考えられる作品を見ていく。

堀河院御時、出納が腹立ちてへやのしうといふものを、みくらのしたにこむなるを聞きて

源中納言国信

へやのしうみくらのしたにこもるなり

つけよとせめありければ

をさめどのにはところなしとて〔散木奇歌集〕一六一五)

わがこひはみくらのやまにうつしてむほどなき身にはおき所なし〔古今和歌六帖〕山 八七〇)

前句にある「みくら」が和歌に詠まれるとき、それは「みくらのやま」という歌枕として用いられることがほとんどであった。⁽⁴⁾右の連歌以前に、和歌や連歌に宮中の「みくら」が歌われた例はなく、「みくら」という言葉で想起される古歌はおそらく「みくらやま」を詠じたものとなろう。その「みくらやま」を詠んだ歌々のなかでも〔古今和歌六帖〕八七〇の結句は「ところなしとて」とした付句と句の形が近く、俊頼は「みくら」を詠みこんだ前句から先行歌である〔古今和歌六帖〕八七〇を連想したと思われる。

人人あまたやはたのみかぐらにまゐりたりけるに、ことはてて又の日、別当法印光清が堂の池のつり殿に人あなみてあそびけるに、光清連歌つくることなんえたることとおほゆる、ただいま連歌つけばやなど申しゐたりけるに、かたのごとくとてまうしたりける
俊重
つりどののしたにはいをやすぎざらん

光清しきりに秦じけれども、えつけでやみにしことなど、かへりてかたりしかばこころみにとて
うつばりのかけそこに見えつつ（『散木奇歌集』一五八三）

池のほとりにもみぢのちるをよめる みつね

風ふけばおつるもみぢば水きよみちらぬかけさへそこに見えつつ

（『古今和歌集』秋歌下 三〇四／『古今和歌六帖』紅葉 四〇八〇）

題不知 読人不知

さは水にかはづなくなりやまぶきのうつろふいろやそこにみゆらん

（『拾遺抄』春 四八／『古今和歌六帖』かはづ 一六〇四）

この連歌は、前句の「つりどの」に対して付句に「うつばり」という対になるような語を設定し、さらに「釣り」「魚」「針」「（水）底」と縁語になるような語が全体に散りばめられているなど、短連歌に典型的な機知問答の形をとっている。それだけでもかなり複雑な構成で付句を作っていると言えるのであるが、さらに語彙の重なり具合からみて俊頼は『古今集』三〇四や『拾遺抄』四八あたりの古歌を踏まえて詠んでいた可能性を指摘できるのではなからうか。あるいは、

「檜垣嬬集」・「大和物語」に共通して見られる連歌、

すきものどもあつまりて、よみがたからむすゑつけさせむとて、かくいふ
わたつみのなかにぞたてるさをしかは

とて、これがすゑつけよといへば

秋のやまべぞそこに見ゆらむ（「檜垣嬬集」二五ノ「大和物語」百二十八段 二〇四）

あたりが脳裡にあつたとも考えられる。いずれの先行詠も広く読まれた可能性の高い勅撰集や歌物語に含まれており、さらに水面に映る景物を主眼としている点で俊頼の付句と共通していることからしても、これらが俊頼の句に影響を与えていた可能性は低くない。また俊頼は、次のような付句も詠んでいる。

堀河院御時うりふねかきいれたりけるをみて 肥後君

うりふねほうみすぎてこそまゐりたれ

まゐりたりときこしめして、御前にめされてつけよとおほせごとありければつかうまつりける

なみにふられてみなそこにみゆ（「散木奇歌集」一五六九）

ここでも俊頼は「水底になにか見える」ということを中心に据えて詠じており、水に関係する連歌を作るにあたって水面に映る景色を詠むのは俊頼にとつて常套的な方法になっていたと思われる。これらのことより、俊頼はおそ

らく矛盾や謎をどのように捌くか、古い例から学んでいたと考えられよう。

古歌の影響が見られる俊頼の作例は以上であるが、俊頼が短連歌を集成した『俊頼髓脳』の作品のなかにも古歌の影響を受けたと思しき連歌が散見される。

頼経

桃園のもの花こそさきにけれ

公資の朝臣

梅津のむめはちりやしぬらむ

(『俊頼髓脳』三七四／『金葉和歌集(二度本)』雑部下 連歌 六四九／『金葉和歌集(三奏本)』雑下 六四一 *『金葉集』では、前句は「頼慶法師」とされている)

人のかうぶりする所にて、ふぢの花をかざして よみ人しらず

打ちよする浪の花こそさきにけれちよ松風やはるになるらん(『後撰和歌集』慶賀 一三七四)

後撰集歌の二・三句は連歌とよく重なり合っている上に結句が「らむ」で結ばれており、上句と下句に「波の花」「松風」と対になるような言葉が詠み込まれている。また、連歌との関係の深い実方の家集には「いでたちてともまつほどのひさしきはまさきのかづらちりやしぬらむ」(『実方集』五〇)というような歌もある。これらのことから、『後撰集』にある古歌を意識して作られた頼経の前句に対抗し、公資が「ちりやしぬらむ」と歌った実方詠を用いて応じた

可能性を考えてもよいように思う。さまざまな先行歌を蓄えていた歌人同士が、当座の座興において互いの知識を駆使して挑み合うことで連歌を楽しんだとする推測は、それほど無理のないことであろう。

慶暹

むめの花がさ着たるみのむし

葉犬丸

雨よりは風ふくなどや思ふらむ

これは、慶暹律師の房に、人々まかりてあそびけるに、十歳ばかりありける稚児の、みの虫の梅の枝につきたりけるを見て、したりけるを、人々、え付けざりけるに、葉犬丸といひけるが、付けたりけるとぞ。さて、その童をば、こころありける童なればとて、法師になして、よろしきものになむ、つかひける。

〔俊頼髓脳〕三八七ノ〔金葉和歌集（二度本）〕雑部下 連歌 六六二

かへしものうた

あをやぎをかたいとによりて鶯のぬふてふ笠は梅の花がさ〔古今和歌集〕神あそびのうた 一〇八一

「梅の花笠」は古くは古今集歌に用いられ、その後も用例の多い句である。これに対して、「みのむし」を用いた和歌は少なく、右の連歌以前に和歌に詠まれた作品となると、管見によれば兼輔・頼基・和泉式部の三首である。これらのうち「梅の花笠」とともに詠みあわされた例は、和泉式部の一首のみであった。

やなぎにみのむしのつきたるをみて

雨ふらば梅の花がさ有るものを柳につけるみのむしのなぞ（『和泉式部集』五一四）

慶暹は十歳ばかりの稚児の発言から、非常に珍しい取り合わせをしていた和泉式部詠を想起し、この前句を詠んだのではなからうか。ところで、葉犬丸の付句がどのような点で賞賛を得たかを考えるとき、前句の「かさ」・「みの」に対して「雨」・「風」で受けたからというだけでは当たり前に過ぎる。やはり、対句的な応答以外の部分に創意を求め必要があるように思う。それは和泉式部詠において「雨ふらば梅の花がさ有るものを」とすでに詠まれていた内容を踏まえ、「雨よりは風ふく」と思ったからこそ梅の花笠を必要としたのだと応じた点にあるのではなからうか。古歌に新たな展開を加えつつ、前句に対句的に応ずるという構造があったからこそ、葉犬丸の句は賞賛されたと稿者は考えている。もつとも、葉犬丸自身に構造に対する意識がどこまであったかは不明である。だが少なくとも、付句に接した慶暹の周囲や俊頼はどのように解釈したのであろう。

続いて『俊頼髓脳』に収録されている連歌も典拠を持つと思われる作品であることから、このことは間接的にはあるが補強されよう。

重之

物あはれなる春のあけぼの

修行者

虫のねのよわりし秋のくれよりも（『俊頼髓脳』三八八）

春の曙と秋の夕暮れを対置させていることから考えて、連歌は明らかに『枕草子』一段を典拠として⁽⁵⁾いる。しかも修行者の付句は「枕草子」が「風の音むしのねなど、はたいふべきにあらず。」というように、ひたすら秋の夕暮れを賞賛しているのに対して、「虫のねのよわりし」と限定を設け、その上で春の曙を賞賛している点で、古歌に新しさを加えた葉犬丸の付句に通じるものがあるといえよう。

もりふさ

きのふより今日こそかへれあすかより

つねみのわう

みかのはらゆく、心ちこそすれ

これは、越前にて、父の供にて、あすかの御社に参りて、またの日、帰るとて、申して侍りける。

〔俊頼髓脳〕三九三／〔続詞花和歌集〕物名 九四二 *初句「昨日きて」

年のはてによめる 　　はるみちのつらき

昨日といひけふとくらしてあすかがは流れてはやき月日なりけり

〔古今和歌集〕冬歌 三四一／〔古今和歌六帖〕としのくれ 二七四

題しらず 　　読人しらず

世中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせになる〔古今和歌集〕雑歌下 九三三

東山にもみぢ見にまかりて又の日のつとめてまかりかへるとてよみ侍りける 　　惠京法師

昨日よりけふはまさされるもみぢばのあすの色をばみでやかへらん〔拾遺抄〕秋 一二四

右のように、「昨日」・「今日」・「明日」という言葉が一つの歌に詠みこまれることは、それほど珍しいことではない。「あすかの御社」で詠まれた盛房の前句も、これらの古歌に学んだものだと思うられる。この前句を受けたつねみのわう〔統詞花集〕では「ともなるさぶらひ」はそれを十分承知した上で、同様に〔古今集〕歌である、

題しらず
よみ人しらず

都いでて今日みかの原いづみ河かは風さむし衣かせ山

〔古今和歌集〕羈旅歌 四〇八／〔古今和歌六帖〕さふのころも 三三三五／〔新撰和歌〕別 旅 一八八

を用いて付句を詠んだものであろう。〔古今集〕四〇八の上の句のように「みかの原」に「三日」を重ねて詠む例は、後代には見られるもの、盛房らの連歌以前にはこの〔古今集〕歌しかない。おそらく、つねみのわうは前句において「三日間」という時間の経過が和歌的な発想によって表現されたことから、〔古今集〕四〇八は越前の地での連歌であるため実際の場にはそぐわないものの、同じく古歌に拠った「みかの原」を持ち出して応じたと考えられる。

頼光

たでかる舟のすぐるなりけり

相模が母

あさまだきからろの音のきこゆるは

これは、頼光が、但馬の守にて侍りけるときに、しとみあげける程に、前のけた川より、舟のくだりけるを、「いかなる舟のくだる」と、問はせければ、「たで刈りてまかる舟なり」といひけるを聞きて、いひけるとぞ。

〔俊頼髓脳〕四〇〇／＼〔金葉和歌集（二度本）〕連歌 六五九

からことといふ所にて春のたちける日よめる 安倍清行朝臣

浪のおとのけさからことにきこゆるは春のしらべや改るらむ

〔古今和歌集〕物名 四五六／＼〔古今和歌六帖〕こと 三三九六〇

夕暮にむら鳥のすぐるを見て

松風のふくひとこゑとききつるはむれたる鳥の過ぐるなりけり〔能因法師集〕四一

ここで取りあげた連歌と『能因法師集』四一とは第三句・結句がよく重なりあい、さらに前句・上句で提出された謎（問いかけ）に対して付句・下句で答えるという形がよく似ている。これら二作品の根底には、『古今集』四五六の安倍清行歌が揺曳していると考えられるものの、頼光句の結句が「すぐるなりけり」という形に整えられていることからして、やはり直接には能因歌が引かれていたと見てよいだろう。『俊頼髓脳』・『金葉集』ともに頼光がこの句を詠んだ事情について、和歌としても連歌としても口へのほせたわけではなく、ただの「口ずさみ」に過ぎなかったとしている。しかし、頼光は『拾遺集』を初出として『後拾遺集』・『金葉集』などの勅撰集に入集しており、藤原実方や藤原長能といった著名な歌人らとの交流があったことからしても、当時それなりに実力を認められていた歌人であったと考えら

れる。そのような人物であるならば、ちよつとした口ずさみにも古歌を下敷きとして用いることは当たり前ではなかつたかと思う。少なくとも、『散木奇歌集』において小一条院歌を引いて「いしやまのかねのこゑこそきこゆなれ」と詠んだ俊頼は、古歌を根底に置きつつ口ずさんだ作品であると解釈した上でこの連歌を評価し、『俊頼髓脳』の中に選び入れたのではなからうか。

道信の中將の、山吹の花をもちて、上の御局といへる所を、すぎけるに、女房達、あまたぬこぼれて、「さるめでたき物を持ちて、ただにすぐるやうやある」と、いひかけたりければ、もとよりや、まうけたりけむ、

口なしにちしほやちしほそめてけり

といひて、さし入れりければ、若き人々、え取らざりければ、おくに、伊勢大輔がさぶらひけるを、「あれとれ」と宮の仰せられければ、うけ給ひて、一間が程を、ゐざり出でけるに、思ひよりて、

こはえもいはぬ花のいろかな

とこそ、付けたりけれ。

〔俊頼髓脳〕四四〇／『統詞花和歌集』物名 九三五／『袋草紙』一六一 *付句のみ／『八雲御抄』四七

藤原道信は正暦五年（九九四）に二十三歳で夭折しているので、寛弘五年（一〇〇八）あたりから上東門院に出仕したといわれている伊勢大輔との間に、『俊頼髓脳』が描くような連歌の応酬などありようがない。この連歌が実作か仮構かを断ずるには資料が足りないが、生存年代の齟齬から考えて少なくとも一方の人物は仮託である。あるいは、このエピソードが歌集などにあらわれるようになるのは『俊頼髓脳』と相前後する時期以降であるので、連歌とともに

に話自体がこの頃に創作されたことも推測されよう。創作の実否についてはひとまず措くとしても、このエピソードの登場人物として道信と伊勢大輔とが設定されたのは何故であろうか。伊勢大輔については、後に『百人一首』にもとられた「いにしへのならのみやこのやへ桜」の歌を詠んだときと状況がよく似ており、貴人の依頼による即興という設定から付句の作者としてここに据えられたと考えられる。一方、道信については、家集に連歌作品が残されており、『大鏡』には「いみじき和歌の上手」という記述があるものの、即興・即詠に関連する著名な逸話もたない。道信と交流のあった実方などはその類の話に事欠かない人物であったが、ここで選ばれているのは実方ではなく道信である。それは道信の詠んだ歌に理由があるのではなからうか。

いたうわづらひ給ひければほかにわたしたてまつりけるに、かぎりにおぼしければ、きたの方の御もとへ山ぶきのきぬたてまつり給ふとて

くちなしの色にやふかくそみにけん思ふ事をもいはでやみにし

〔道信集〕九三ノ『千載和歌集』哀傷歌 五四九 藤原道信朝臣

この歌は道信が死に際して詠んだものであるので『俊頼髓脳』のエピソードとは状況がかなり違うが、詞書に「山ぶき（のきぬ）」とあることや、「口なし」からはじまる詠歌内の使用語彙の重なりからして、この歌と連歌との間には浅からぬ影響関係があると考えてよいように思われる。

くちなしの色にこころをそめしよりいはでこころにもをこそ思へ

古くは、この『古今和歌六帖』の素性歌10もあり、道信歌自体がこの歌の影響下にあるのは明らかである。当該連歌も素性歌から直接に影響を受けた可能性は捨てきれないが、道信歌では「ふかく」と簡単に表していた部分を「ちしほやちしほ」と幾度も染料に浸すことで表すようにしたあたりに技巧の深まりが見られる上、この上句と連歌の前句とは殆どすべてが対応する関係にあることは注目されよう。現存する資料から道信歌と連歌との先後を断ずることは難しいものの、時代設定が一条朝となっている挿話のなかに即興歌とはさほど関連の強くない道信が置かれていることを考えれば、『道信集』九三が下敷きとなって連歌が作られた可能性は低くないとみて良いのではなからうか。

ここまで、俊頼の実作の連歌と、彼が集成した『俊頼髓腦』に選び入れられた連歌のなかに先行歌の影響が見られることを確認してきた。本節で取り上げた連歌はいずれも、先行研究では縁語・秀句・対句的な要素といった「連歌らしさ」に重点を置いて分析がなされてきた。そのような目立つてわかりやすい技法に押しやられ、あまり意識されなかったが、先行歌を利用するというような本歌取りに準じる手法が内在したことは、やはり見過ごしにしてはならないだろう。即応を本分とする連歌は、前句にせよ付句にせよ、場に応じて即座に詠み出されることが重要となってくる。場に即応しようとするとき、その場に適したキーワードを先行する和歌から引き出して自らの句に詠み入れることは有効な手段になったと思われる。

連歌とは少し離れるが、俊頼の周辺では「歌絵」の歌を詠むという遊びが行われていて、俊頼はこれも得意としていたらしく連歌の付句に指名されるように「歌絵」の歌の作者として指名されることがしばしばあった。この「歌絵」の歌というのは、判じ絵的な絵柄に対して当座に歌をつけるという遊戯的な営みの中で生みだされるものであり、そ

のような歌の成り立ちは短連歌が詠み出される場合と近い。詳しくは「歌絵」について論じた別稿を参照していただくとして、短連歌が詠まれるのと類似する当座の場において詠み出された「歌絵」の歌には、ある程度の水準の歌を即座に詠み出すための工夫として古歌を取るという方法が用いられていた。つまり、俊頼が短連歌で用いていた方法は、短連歌のみならず彼が即興詠を作るにあたって一つの方法となっていたのである。

「先行歌を取る」という方法が連歌と歌絵といずれにおいて、まず確立したのかは判然としないものの、俊頼が即興的に作品を作る場合には先行する作品を取って作品を作るという方法が有効であるという認識があつたことは間違いないだろう。

二、連歌にあらわれる古歌の「型」

前節において、俊頼は先行する和歌を本歌取りのように用いて連歌の句を作っており、彼の連歌は従来考えられてきたよりも先行作品を取り入れようとする姿勢のあつたことを確認してきた。ただし、俊頼が先行歌を取り入れると、きの方法はこれだけではない。一般的な本歌取りとは少し形は異なるのであるが、やはり先行歌に学んだ連歌の一群が俊頼周辺に見られる。俊頼が連歌において先行する和歌に学ぶ場合には、特定の和歌からというより、何首もの和歌に共通する構造——言ってみれば句の「型」を取り入れたと思われる例が幾つも見られるのである。

つくしにはべりけるころ、すずくらにほしひのありけるをみて

有僧

すずくらにふるきほしひぞつきもせぬ

人のかたりけるをききて

たが領領にならむとすらん（『散木奇歌集』一六一八）

また、女御、れいのやうにやりて

たにがはのせぜのたまもをかきつめてたがみくづとかならんとすらむ（『斎宮女御集』三〇）

くさふかくしげれるやどをいでいなばたがかりのことならむとすらん（『賀茂保憲女集』一九五）

をる人のてにはとまらで梅の花たがうつりがにならんとすらん（『山家集』恋百首 一二六一）

結句が「ならむとすらん」となる歌は、『拾遺集』の「うたがはしほかにわたせるふみみれば我やとだえにならむとすらん」（二二〇一 春宮大夫道綱母）をはじめとして作例が多い。しかしこれが「たがうならむとすらん」という形になると、右にあげた三例のみとなる。このうち先行歌と認められるのは斎宮女御と賀茂保憲女の歌であるが、これら二首の詠歌内容は『散木奇歌集』の連歌と重なるところがなく、本歌であると認定するには些か繋がりが弱い。だが、先行歌二首の下句と俊頼の連歌の付句とは、「たがうならむとすらん」の「う」の部分で上句（前句）をどのように受けたのかというところが勘所であり、極端に言えばここ以外の部分は添え物ということになる。それゆえ、ほぼ固定化した句の「型」を先行歌から学んでそれを利用することで、付句作者が純粹に創作する文字数を減らし、そうすることで前句において提示された謎を素早く捌くことのできる状況を得られたと言えよう。これと同様のことは次の例にも見られる。

伏見の山ざとにて、あそびどもをあるじのおこしたりけるを、あそべなどかうてはなどいひけるついでに
六郎大夫孝清

あそびをだにもせぬあそびかな

人人つけよとありければ

さもこそは歌もうたはぬきみならめ（『散木奇歌集』一六二二）

みちのくのくににて、このかくれたるに

さもこそは人におとれる我ならめおのが子にさへおくれぬるかな（『重之集』二二二三）

とてやりつ、ふつかばかりまつに、おとづれぬに

さもこそはしぬともいはめいつしかとよろこびながらとはぬ君かな（『和泉式部統集』三三〇）

石清水にまゐりて侍ける女のすぎのきのもとにすみよしの松をいはひて侍ればかみのやしろのはしら

にかきつけ侍りける　よみ人しらず

さもこそはやどはかはらめすみよしの松さへすぎになりにけるかな

（『後拾遺和歌集』雑六　神祇　一一七六）

右にあげた『重之集』『和泉式部統集』『後拾遺集』の三首は、どれも「さもこそはならめかな」という句の「型」をとった和歌である。厳密にいえば、「ならめ」の位置にずれがある上、どの歌も内容的に連歌と重なるところがな
いので、どれか一首を本歌として認めることは難しい。しかしながら、勅撰集入集歌や著名歌人の歌のなかで同じ句

の形が繰り返される上、次にあげるように俊頼とほぼ同時代の歌々にも同じ句の「型」がみられるのは看過できない。

摂政左大臣家にて旅宿鹿といへることをよめる 源雅光

さもこそはみやこ恋しきたびならめしかのねにさへぬるそでかな

〔金葉和歌集（二度本）〕 秋部 二三五／〔金葉和歌集（三奏本）〕 秋 二二三／〔金葉和歌集（初度本）〕

秋部 三二六

たえにける人のもとに、人にかはりて

さもこそはかりそめならめあやめぐさやがてのきにもかれにけるかな〔周防内侍集〕 八一

三条殿に中宮おはしまししに、その御方にて人人月の心をよみしに

さもこそはくもりなき世の月ならめみる人までもすむ心かな〔成通集〕 二二

右大臣とうしの長さにてだいきやうありし時、とう三条のひんがしのたいのこうばいをみて

さもこそはたえせぬいへのかせならめをりをすぐさずにはふむめかな〔肥後集〕 四五

これらの歌群が存在することから、「さもこそはくならめくかな」という句の「型」は当時かなり流行していたらしいことが推測される。「くかな」と結ぶ前句を目にした俊頼は、和歌で類々と用いられていた「さもこそはくならめくかな」という和歌の「型」を連歌に転用して付句を作ったのではなからうか。〔散木奇歌集〕一五八二においても、類似の「型」を用いて付句を詠んでおり

うといふ鳥のありけるをみて僧のしたりける

あらふとみれどくろきとりかな

人もつけざりければのちに聞きて

さもこそはずみのえならめよととも(『散木奇歌集』一五八二)

このように「うかな」で結ばれるという以外に共通性のない前句に対して、繰り返し類似の形の付句を詠んでいるというのは、俊賴が特定の和歌を本歌取りするのではなく、何首かに共通する「型」を学んでいたこと(註左)の証左になる。そして、この方法は俊賴のみに見られる特殊なものではなく、彼の周辺の歌人らにも共通して見られる方法であった。

法橋なりける人の、この比人*にい*はるる事ありけるをたはぶれて

隆源阿闍梨

まことにやのりのはしよりおちにける

法橋しきりに案じけれどほどへければ

むべきたなげにみゆるなりけり(『散木奇歌集』一五九〇)

「まことにやくにける」の形の句を含む歌は、管見によれば十二首ある。それらのうちで、隆源阿闍梨らの連歌に先行するものやほぼ同時代に作られたと思われるものは次の歌々となる。

頼家朝臣よをそむきぬとききてつかはしける

律師長済

まことにやおなじみちにはいりにけるひとりはにしへゆかじとおもふに〔後拾遺和歌集〕雜三 一〇二三)

この女は人のもとなればかへしにと「一」といひたるに、をとこすまず、のきて

まことにやとらふすのべはあれにける人のこころのあさぢはらにて〔輔尹集〕五五)

しんさいもあまになりけるを、のちにききてやりし

まことにやおもひのいへはいでにけるすしきかぜのつてにきくかな〔肥後集〕一三九)

つぎのひかや、俊恵が許より

まことにや三のふねにはのりにけるながれてのよのためしとぞきく〔重家集〕三九三)

この句の形は、前の二例とは違って前句にあらわれている。和歌の例においては、「まことにやくにける」という上句によって示された疑問が、どういった状況によつてもたらされたのか下句で説明されている場合が多い。これは連歌において前句で提示された謎を付句で解くという形によく似ている。これは謎を提出するにあたつて用い易い句の「型」を、勅撰集入集歌や著名歌人の和歌から学び、それを連歌へと転用したのだろう。

殿下中将にておはしけるころ、人人に連歌せさせてあそばせ給ひけるにせさせ給ひける

かりぎぬはいくのかたちしおほつかな

これを人人つけおほせたるやうにもなしとて、のちに人のかたりければ心みにとてつけける

しかさぞいといふ人もなし〔散木奇歌集〕一五六八)

かりぎぬはいくのかたちしおほつかな

俊重

わがせこにこそとふべかりけれ

わがせことは、男をいふなり。男は、いかでか知らむと、人々申しけり。これを思ふに、咎あらじ。

〔俊頼髓腦〕四〇七／〔続詞花和歌集〕法性寺入道前太政大臣の歌のもとを申していへりければ 九四八

源俊重／〔袖中抄〕一八八 中納言（法性寺入道殿）・俊重

【散木奇歌集】一五六八は、忠通が詠んだ前句に当座では満足のいく句が付けられなかった（『俊頼髓腦』四〇七の付句を含む。）ため、そのことを俊重から伝え聞いた俊頼が試みに付句を作つて連歌を完成させたものである。俊頼が良い句の付かない難しい前句に対して求められて句を作るという自讃譚めいた連歌が『散木奇歌集』には多く収録されており、この連歌もそれに準じるものと思われる。ここで俊頼の付句は、「しかさぞいる」と前句の「狩り」に対して「鹿」で受けさらに「射る」と縁語を重ねた上に、「鹿＝然」「射る＝居る」と言うように掛詞を用いて技巧的に応じたところに要点がある。この付け合いの面白さゆえに見過ごされがちであるが、付句の結びは「いふ人もなし」と古歌に用例の見られる語が用いられている。つまり、本節であげてきた他の例と同様に、古歌の「型」を自らの句に用いることで創作する文字数を少なくし、素早く前句に応じるといふ手法を取つていたのである。古歌の「型」を用いているという点では元々の付句を詠んだ俊重においても同様であつた。

紀のとしさだが阿波のすけにまかりける時に、むまのはなむけせむとてけふといひおくれりける時に、
ここかしこにまかりありきて夜ふくるまで見えざりければつかはしける 　　なりひらの朝臣

今ぞしるくるしき物と人またむさとをばかれずとふべかりけり

〔古今和歌集〕雑歌下 九六九／〔古今和歌六帖〕さと 一二九〇 　　なりひら／〔新撰和歌〕三〇三／〔伊

勢物語〕第四十八段 八九 男

寛仁二年正月、入道前太政大臣大饗しはべりける屏風に山ざとのもみぢみるひときたるところをよみは
べりける 　　前大納言公任

山ざとのもみぢみにとやおもふらんちりはててこそとみべかりけれ

〔後拾遺和歌集〕秋上 三五九／〔公任集〕五五〇／〔采花物語〕一五三／〔今昔物語集〕公任大納言

於白川家読和歌語第卅四 八一

「とふべかりけり（れ）」という句は、業平歌や公任歌のなかでも著名な歌の一つに用いられている他、俊重の付句
以前の歌々に頻出する。ただし、先行歌の「とふ」の多くは「訪れる」の意で用いられているので、それを「訊ねる」
の意味に転じて使っているところは俊重の工夫であろう。また、同時代の歌人の作品として、

基俊

この堂は神か仏かおぼつかない

童

ほうしみにぞとふべかりける（『古今著聞集』基俊小童と問答の事 八〇）

がある。説話集にしか残されていない作品のため実作か否かを判断することは難しいが、同時代の歌人の作品としてこのような連歌が残されていると言うことは、「おぼつかな」という前句に対して「とふべかりける」と受ける形が、この時代の連歌にとって常套的な表現になっていたことを示すのではなからうか。

二条どこのせ行のひ、ひつどものおほくみゆれば、ためすけ

かのひつはなにぞのひつぞおぼつかな

といへば

かたみのまへのほかるなりけり（『実方集』六九）

堀河院御時、中宮の御方にうへわたらせ給ひて、藏人永実をめして、ごそに侍りけるたき物のひをけを
めしにつかはしたりければ、ゑかきたるきりひをけをとらすとて、周防内侍歌のすゑをいへりければ、

とるとて 藤原永実

花やさきもみぢやすらむおほつかな
かさすみかけたるきりひをけかな

（『統詞花和歌集』九四四／『袋草紙』一六一／『和歌色葉』二二 種種名体 三五）

これらのように同時代以前にも連歌の前句で「おぼつかな」と言いかける例は見られ、連歌では割合に早い時期から常用される「型」となっていたとも推測される。また、和歌の上句で「おぼつかな」と詠む例は数多く、そも

そも和歌で頻用されてきたこの句は、問答に発展しやすい意味内容からも連歌に取り入れやすかったのであろう。

田上に侍りけるころ、日のくれがたにいし山のかたにかねのこゑの聞えければくちずさびに

いしやまのかねのこゑこそきこゆなれ

これを連歌にききなして 俊重

たがうちなしにたかくなるらん〔散木奇歌集〕一五九三

をんなのもとにてあか月かねをききて 小一条院

あか月のかねのこゑこそきこゆなれこれをいりあひとおもはましかば〔後拾遺和歌集〕雜二 九一八

俊頼の前句は、『後拾遺集』の小一条院詠との句の一致や、連歌の詠まれた「日のくれがた」というシチュエーションが小一条院詠の下句の「これをいりあひと」という言葉を想起しやすい状況にあったことなどから、ここまでに出してきた例とは違って特定の古歌に学んだ作品のようにも考えられる。しかし、この連歌とほぼ同時代の作品として次の三つがあることを見落とすことはできない。

永成法師

あづまうどの声こそきたにきこゆなれ

権律師慶範

みちのくによりこしにやあるらむ

ふたりける所の、北のかたに、声なまりたる人の、物いひけるを聞きて、しけるとぞ。

【俊頼髓脳】三七三／『金葉和歌集(二度本)』雑部下 連歌 六四八 永成法師・権律師慶範／

【金葉和歌集(三奏本)』雑下 六四〇 永成法師・律師慶範)

加茂成助

しめのうちにきねの音こそ聞ゆなれ

行重

いかなる神のつくにかあるらむ

賀茂の御社にて、よねのしろむる音のしけるを聞きて、しけるとぞ。

(【俊頼髓脳】三七八／『金葉和歌集(二度本)』雑部 連歌 賀茂のやしろにて物つくおとのしけるを

ききて 六五〇 神主成助・行重／『金葉和歌集(三奏本)』雑下 六四二)

連歌、しかまつにてかりを聞きて 前中納言通房卿

しかまつにかりのこそきこゆなれいほのとなりにつるやなくらん

【夫木和歌抄】秋部 四九八五／『江師集』雑部 連歌 三二五)

これらはいずれも前句で「(何かの音声)こそきこゆなれ」と詠じたのに対し、付句において「くらむ」と推量の意を示して結んでいる。三作品のうち、匡房は俊頼と活躍期が重なっているため作品成立の先後を定めることはしたが、残り二作品については作者の没年や後に『金葉集』に選り入れられていることなどから考えて、俊頼・俊重は

これら二つの連歌を参考にし、その応答の「型」を取り入れて連歌を詠んでいたのだと言えるのではなからうか。さらによれば、この金葉集入集連歌自体が先行和歌に多用されるパターンを取りこむという手法によって作り上げられているのである。

神楽の心を 藤原政時

あさくらのこゑこそ空にきこゆなれあまの岩戸もいまや明くらん

〔統詞花和歌集〕神祇 三六四／『宝物集』五七／『金葉和歌集（初度本）』神楽のこころをよめる 四二八 藤原致時
いはまわくみづのおとこそきこゆなれあきのよふかくなるにやあるらむ

ちとせふるたづのこゑこそきこゆなれけさしらつゆやおきまさるらむ
〔多武峰往生院千世君歌合〕五番 水有幽音 右 一〇 泉円

うぐひすのねこそはるかにきこゆなれこや山ざとのしるしなるらむ
〔無動寺和尚賢聖院歌合〕二番 白露 右 四 広算法印
〔経信集〕山家聞鶯 一四

行にあげたように、「(何かの音声)こそきこゆなれくらん」という句の形は、同時代以前の和歌にさまざまな用例が見られるものであった。「(何かの音声)こそきこゆなれくらん」という形式は、音声に関わる和歌を詠むにあたってすでに一つのパターンを形成しており、連歌のように間を置かず対応せねばならない場合に、前句で「こそきこゆなれ」というように詠み慣れた「型」が出てきたならば、その和歌のパターンに沿った付句「くらん」が詠まれることは、半ば必然であったと言えるのではなからうか。

これと同様のことが行重の付句についても言える。「いかなるゝにかあるらん」も、そもそも和歌で用いられていた句の形であった。

たのみこし月日はただに過ぎにしをいかなる空の露にか有るらん（『公任集』四六一）

いと久しくあはぬ人のもとより、便なかるまじからんをりつげよ、といひたるに

たしかにもおほえざりけりあふ事はいかなるときのことにかあるらん（『和泉式部統集』三〇四）

おなじ日しやうぶにつけて、かねふさの君の

かきたえてとはぬに見えぬあやめ草いかなることのうきにかあるらん（『赤染衛門集』五九四）

前句のパターンから付句は「らん」と応ずる流れがあったと考えられるが、ここで行重は著名歌人らも使っていた「いかなるゝにかあるらん」という先行歌の句のパターンを更に重ね合わせたのである。当該連歌について行重は、「杵」と「巫女（きね）」という掛詞に対して「搗く」と「憑く」という掛詞で連歌らしく軽妙に応じる同時に、先行歌の「型」を踏襲しつつ仕掛けられた前句に、やはり先行歌の「型」で応じるというところにも面白みを含ませているのではなからうか。

あるいは、行重にはそこまでの意図はなくて連歌を作っていたのだとしても、『俊頼髓脳』や『金葉集』に連歌を選び入れた俊頼には、そういった面白さを重要視する狙いがあったのではないかと思われる。『俊頼髓脳』を見ていくと、先行歌の句の「型」を取り入れたと思われる連歌が幾つも入集している。

永源法師

たにはむこまはくろにぞありける

永成法師

なはしろの水にはかげと見えつれど

谷は、畔と申す所のあるに、馬にも、黒毛と申す馬のあるに、苗代水に、かげと見えつるは、くろにぞありけると、いへることば、まことにたくみなり。

〔俊頼髓腦〕四〇三／『金葉和歌集（二度本）』雜部下 連歌 のなかにむまのたてるをみて 六五三

永源法師・永成法師／『金葉和歌集（三奏本）』六四五

いはのうへにおふるこ松もひきつれど猶ねがたきは君にぞ有りける（『拾遺和歌集』恋一 六四八）

京極前関白大井河にまかりて、水辺紅葉といふことをよみ侍りけるに 堀川左大臣

となせがはおとにはたきとききつれどみればもみちのふちにぞありける

〔続古今和歌集〕冬歌 五六四／『和漢兼作集』八八三

遠近のきしをば浪のへだつれどかよふは花の色にぞ有りける（『元輔集』一七）

当該連歌と拾遺集歌・堀川左大臣歌・元輔歌の三首の詠歌内容には共通するところはないものの、いずれも「つれど」にぞありける」という句の「型」をとっており、ここでも和歌で常用される句のパターンが利用されている。また、「つれど」にぞありける」という句の形は

左京大夫経忠の許にて残菊薫衣といへる事を

うつろへる色をば霜のへだつれど香はわが袖の物にぞありける

〔散木奇歌集〕秋部 五四八／〔和歌一字抄〕四七〇

四番 左 定長

さをしかのなくねはよそにききつれど涙は袖の物にぞ有りける

右勝 季経朝臣

山たかみおろすあらしやよわるらんかすかに成りぬさをしかの聲

左は、こ俊頼朝臣の歌に、さをしかのなくねは野へにきこゆれどなみだは床の物にぞ有りける、と侍る

めればいかが、右こしの五もじおもふべかりける、おほかたは心なきにあらねば可為右勝

〔太皇太后宮亮平経盛朝臣家歌合〕鹿 三二・三三

というように、俊頼も自詠において繰り返し用いていた。この点から考えても、「つれどゝにぞありける」という句の形式は連歌に転用するに足る先行列として俊頼に認識されやすい状況にあったと考えられる。

道なかの君

あやしくもひざよりしものさゆるかな

実方中将

こしのわたりに雪やふるらむ

これは、宇治のわたりにて、足のひえければ、しけるとぞ。(『俊頼髓脳』三七一)

九条右大臣賀の屏風 兼盛

あやしくもしかのたちの見えぬかなをぐらの山に我やきぬらん

〔拾遺抄〕夏 七七／〔拾遺和歌集〕夏 一二八 平兼盛／〔古来風体抄〕卷下 拾遺和歌集 三三三

／〔宝物集〕第四冊 三八四

おなじ少将かよひ侍りける所に、兵部卿致平のみこまかりて、少将のきみおはしたりといはせ侍りけるを、のちにきき侍りて、かのみこのもにつかはしける

あやしくもわがぬれぎぬをきたるかなみかさの山を人かられて

〔拾遺和歌集〕雑賀 一一九二／〔義孝集〕一八／〔実方集〕二七七

ふみつかはせども返事もせざりける女のもとにつかはしける よみ人しらず

あやしくもいとふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき

〔後撰和歌集〕恋二 六〇八／〔拾遺和歌集〕恋五 九九六

実方や彼と同時代以前の歌人らの詠には、右にあげた以外にも「あやしくもかな」という句が繰り返し用いられていて、当時の和歌においては、ありふれた表現であったと思われる。この「あやしくもかな」という句の形は、『俊頼髓脳』のなかでもう一ヶ所、「あやしくも袖にみなとのさわぐかなもろこしぶねもよせつばかりに」(『俊頼髓脳』

三三八)にも用いられている。この歌は『伊勢物語』第二十六段が出典で、「思ほえず袖にみなとのさわやかなもろこし舟の寄りしばかりに」(五八 男ノ「新古今和歌集」恋歌五 題しらず 一三五八 読人しらず)となっており、初句は「思ほえず」が本来の形であった。それを俊頼は「あやしくも」と記憶違いをして自らの作歌手引書に収録したのである。また、「あやしくも」かな」という句は右に記したように『実方集』二七七にも使われており、これらのことから「あやしくも」かな」という句の「型」は、俊頼の思考においては、和歌でしばしば用いられていたものを実方も常用した上に連歌にも転用した、と認識しやすい位置にあったと考えられよう。

水胤法師

をぎの葉に秋のけしきの見ゆるかな

永源法師

風になびかぬ草はなけれど(『俊頼髓腦』三七九)

ここで前句に用いられている「見ゆるかな」という句は、もともと和歌で非常によく使われる句であるが、連歌においても常套的に用いられている句となっており、水胤法師・永源法師の連歌以前にも作例が見られる。

はしに人のあからさまにふしたりけるを見て、権少将

うたたねのはしともこよひ見ゆるかな

といへば

ゆめぢにわたすなにごそありけれ〔実方集〕三二二

むまのかみ〔一〕あついで、殿上人のまゐるひんがしおもての、みさうじの糸にむまのかかれたるを、

月のあかき夜

ゑなるむまの月のかげにもみゆるかな

とあれば

くかららずこそかきおきてけれ〔四条宮下野集〕一五三

善恵房といふものの、むまよりおちて、てをつきそこなひてありしを、かひのかみありすけ

けふよりはおつるひじりとみゆるかな

またつけるつこける

いまはてつきぬすみかけんさは〔行尊大僧正集〕二七

かはらやをみて 読人不知

かはらやのいたぶきにてもみゆるかな

助俊

つちくれしてやつくりそめけん

〔金葉和歌集（二度本）〕雑部下 連歌 六五四／〔金葉和歌集（三奏本）〕六四六

これらの連歌の付句で用いられている語彙に統一感はないものの、前句で提示された光景を付句で転じて面白みを演出するというように、連歌そのものの基本的な構造は共通している。また、この句が和歌に用いられるとき、

題しらず　よみ人しらず

秋の野の錦のごとも見ゆるかな色なきつゆはそめじと思ふに

〔後撰和歌集〕秋下 三六九／『古今和歌六帖』秋 一一四七　もとかた

故一条のおほいまうちぎみのいへの障子に　能宣

たごのうらにかすみのふかくみゆるかなもしほのけぶり立ちやそふらん

〔拾遺抄〕雑上 三八〇／『拾遺和歌集』雑春 一〇一八

というように、上句の景色がそのように見える矛盾や理由を下句で提示するという形がとられており、連歌の前句・付句にみられる問答的な構造とよく似ている。これらのことから「見ゆるかな」という句は、眼前の景色に対する疑問や矛盾といったものを前句に含意させやすい便利な句として認識される状況にあったと思われる。少なくとも俊頼はそのように認識していたのではなからうか。この「見ゆるかな」という句は『散木奇歌集』の連歌においても頻出の句となっている。

修理大夫顕季あるかれけるに、おほちにくるまのわのかたわもなくてかたぶきてたてるをみて

忠清入道

かたわにてかたわもなしと見ゆるかな

後に彼大夫のえつけざりしとかたられければつける

ここへくるまもいかがしつらん（『散木奇歌集』一五八五）

刑部卿道時の、しほゆあみにつのかくなる所へおはしけるに、ぐしてまかりてしほゆはてて、京へかへるかはじりにふねをこぎいれたるに、ふねのおほくつきてひしめくをみて、わざとならねどもかはじりにふねのへども見ゆるかな

刑部卿、とししげにつけよとありければ、つけたりける

しほのひるとてさわぐなるらん（『散木奇歌集』一六〇六）

この二つの他にも一五七七・一五八六・一六〇二で繰り返し使われ、さらに俊頼は和歌でも七首に用いるなど同時代の歌人らの用例と較べてみても抜きんでて作例が多い⁽⁶⁾。俊頼にとって「見ゆるかな」という句は、連歌でも和歌でも非常に馴染み深い句であったのだろう。

また、『俊頼髓腦』三七九は「うかなうはなけれど」という句との影響関係を想定しうる。

題不知 中納言定頼

としをへてはなに心をくだかなをしむにとまるはるはなけれど

（『後拾遺和歌集』春下 一四四／『定頼集』三三五）

もみちばをおのがものとしてみてしかなみるにいさむる人はなけれど（『重之集』一三三）

げんさいしやうどの（実忠）

あさなあさな袖のこほりのとけぬかなよなよなむすぶ人はなけれど（『宇津保物語』五 さがのゐん 二二六）

なつかしき花橘のにほひかなおもひよそふる袖はなけれど

〔堀河百首〕 盧橘 四六四 河内／〔後葉和歌集〕 夏 九八

俊頼は連歌の句を詠むにあたって「そのなからがうちに言ふべき事の心を、いひ果つるなり。心残りて、付くる人に、言ひ果てさするはわろしとす」(『俊頼髓腦』)と述べている。上句で「うかな」と言い切る形は俊頼の言説に一致しているので、「うかなはなけれど」という和歌で繰り返し使われている句の「型」は、連歌の形式に沿いつつ即応にも効果のあるものとして取り入れられたものと考えられる。

以上、俊頼自身あるいは彼によって収集された連歌は、第一節であげたように特定の和歌から句を求めるだけではなく、何首もの和歌に流行する構造——和歌で繰り返し用例の見られる句の「型」を用いられていたことを見てきた。

これらの場合、連歌と和歌のあいだに内容的に重なるところは無いのだが、もともと和歌において用例の多い句の「型」を連歌に用いたということは、前句の形式に対してどのような付句をすれば構造として安定するかを先行和歌から学んでいたことの証となるのではなからうか。また、和歌において汎用性の高い句の「型」を連歌に取り入れたということは、別の見方をすれば、前句あるいは付句のように通常の和歌の半分しかない文字数を「決まった句」によつて埋め、作者の創作の範囲を狭めるということにならう。これは裏を返せば、作者自身が創作する文字数を極力減らすことで素早く前句に対応するという手法であり、そのように詠むことで連歌の特質である即興性に対応しやすくするという効果があったと考えられる。

おわりに

第一節と第二節とで取り上げた連歌の手法には異なる部分もさまざま見られるものの、「先行作品を取り入れる」という点で共通しているとも言える。しかし、新古今時代に本歌取りが積極的に行われるようになる以前には、先行歌を自詠に取り入れるというのは、あまり歓迎されない行為であった。

古哥を本文にして詠める事あり。それはいふべからず。(『新撰髓脳』)

このように、歌人として尊崇を集めていた公任に否定的な言辞がすでに見られたのである。それにもかかわらず、俊頼は先行作品を連歌に取り入れるという方法を積極的に取り入れた。その理由の一つとしては、第一節で述べたように、場に即座に応じるにはその場に適したキーワードを先行する和歌から取り出して自詠に用いることが有効であると認識されていたためであろう。

また、次の『今鏡』の一節に示されているように、兼目で連歌の用意をしたという俊頼の連歌の作り方にもその理由があると思われる。

おほかたは、見る事聞く事につけて、かねてぞ詠みまうけられける。当座に詠むことは少く、擬作とかきてぞ侍りつる。

(『今鏡』すべらぎの中 第二 玉章⁽¹⁷⁾)

連歌はそもそも即興の要素が強く、どれほど事前に句を準備をしようとも、特に俊頼が求められた付句の場合には、それが実際の場でそのまま生かされるとは考えがたい。「兼二」で述べられることの実際的な意味は、予想される場に相応しいと思われる和歌を事前に広く集めて自らの記憶に蓄え、その場に応じた返答の句の「型」を数多く心に刻んでおくことであり、そうすることによって、少しでも早く前句に対応できるように備えておくことであつたのではなからうか。実際に、俊頼は特定の歌に学んで連歌の句を作るよりも、多くの歌に用いられている汎用性のある句の「型」を利用して句を作るのほうが遙かに多かつたことを、第二節において確認した。さまざまな場において難しい前句を素早く捌くことを多く求められていた俊頼にとつて、周囲の人々にとつても馴染みの句の「型」で形を整えたところへ、その場に応じた一言を添えて付句を整える手法がもつとも有効であつたためであらう。

俊頼が記憶に頼つて先行する和歌を口に出していたらしいこと、そこにかんがりの間違いもみられたこと等は、俊頼が句の「型」を取り入れていたことの傍証となるかもしれない。つねに古歌を弄び、さまざまなバリエーションを編み出そうとしていた歌人にとつて、記憶の混同はいたしかたない事象であつただらう。

本稿では連歌に対して本歌取りの手法が用いられている様子を確認してきたのであるが、のちの本歌取りの隆盛を考えれば、これらの方法が連歌特有の方法として連歌の中に留まっていたとは考えられない。これまでに関係性が注目されたことはなかつたが、俊頼が連歌へ積極的に取り入れた「先行作品を取り入れる」という方法が同時代以降の歌人にどのように影響を与えていったのかということは、本歌取りの成立過程を考える上で欠かすことのできない問題とならう。このことについては別稿に譲り、今後の課題としたい。

注

- (1) 稲田利徳「金葉集」卷十「連歌」の部—小部立設置の意図(『解釈と鑑賞』六十六—七十一、平成十三年十一月)
- (2) (1) 稲田論文の他に、関根慶子「第七章第四節 俊頼と連歌」(『中古私家集の研究 伊勢経信俊頼の集』風間書房、昭和四十二年三月)、小池一行「源俊頼と連歌—散木奇歌集の第十巻を中心として—」(『書陵部紀要』二十号、昭和四十三年十一月)、石川常彦「短連歌史における源俊頼」(『国語国文』三十九—十、昭和四十五年十月)、木藤才蔵「俊頼の連歌とその先駆者たち」(『文学』三十九—二、昭和四十六年二月)、池田富蔵「源俊頼と連歌—その二重構造性を中心として—」(『日本文学研究』十二号、昭和五十一年十一月)、藤原正義「俊頼と連歌」(『北九州大学文学部紀要』十八号、五十三年一月)、乾安代「俊頼髓腦」の連歌(『後藤重郎教授停年退官記念国語国文学論集』名古屋大学出版会、昭和五十九年四月)などがある。

(3) (2) 関根論文

(4) 十首歌中にもみぢを

もみぢ葉をみくらの山にはつ霜はあさとあけてやおきそめつらん(『散木奇歌集』秋部 五五四)

ままきのやたて

みくら山まきのやたててすむたまはとしをつむともくちじとぞ思ふ(『散木奇歌集』雑部下 一五六—)

こほりいけのみつにみてり

けさよりはみくらのいけにつらゝゐてあちのむらとりひま「も」とむらし

(冷泉家時雨亭叢書「散木奇歌集」所収「源木工集」冬部 六四五)

(5) 春はあけぼの。やうやうしろくなくなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

(中略) 秋は夕暮。夕日のさして山のはいとちかうなりたるに、からすのねどころへ行くとして、みつよつ、ふたつみつなどどびいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさくみゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音むしのねなど、はたいふべきにあらず。(『枕草子』一段)

(6) かげきよき月は浪まにいつみ川秋の十日のけふみかの原

〔拾玉集〕詠三百和歌

建仁三年九月十三夜水無瀬歌十五首歌合判後撰詠之

水路秋月 四一三三〇

もものはなさくややよひのみかのほらこつわたりもいまさかりなり (『新撰和歌六帖』三日 五〇 光俊)
なが月の十日余のみかの原河浪きよくやどる月影

〔壬二集〕光明峰寺入道撰政治家百首

河月

六三六ノ

『家隆卿百番自歌』八一

奈良なりける僧

きのふいでてけふもてまゐるあすかみそ

敦光朝臣

みかの原をやすぎてきつらん (『古今著聞集』式部大輔敦光奈良法師と飛鳥味噌を連歌の事 三二四)

(7) 『金葉集』六五九の詞書は「源頼光が但馬守にてありける時、たちのまへにけたがはといふかはある、かみよりふねのくだりけるをしとみあくるさぶらひして、とはせければ、たでと申す物をかりてまかるなりといふをききて、くちずさみにいひける」となつていて、はつきり「くちずさみ」であると述べている。

(8) 女院の中宮と申しける時、内におはしまいに、ならから僧都のやへざくらをまゐらせたるに、二年のとり

いれ人はいままゐりぞとて紫式部のゆづりしに、入道殿さかせたまひて、ただにはとりいれぬものとおはせられしかばいにしへのならのみやこのやへ桜けふ九重ににはひぬるかな

(9) あるところにまゐりて、みすのうちにはわかき人人ものいふをききて

すのうちにつつめくひなのこゑすなり

といへど、いらふる人もなければ

かへすほどこそひさしかりけれ〔『実方集』一八六〕

右のように、実方には女房たちに対して即興の連歌をもとめた実例がある。ところで、これと似た状況、前句が『後撰集』二九三に見られるのであるが、こちらは『実方集』の連歌が女房たちの応答がなかったために不成立となつたのとは異なり、貴人と女房の連歌が成り立っている。あるいは、のちの道信・伊勢大輔の連歌挿話の形成に何らかの関係があつたのではないかとも考えられる。

あきのころほひ、ある所に、女どもあまたすの内に侍りけるに、をとこの歌のものをいひいれて侍りければ、

すゑはうちより　よみ人しらず

白露のおくにあまたの声すれば花の色色有りとしらなん〔『後撰和歌集』秋中 二九三〕

(10) 連歌に先行するかほぼ同時代に詠まれたと思われる「くちなし」の歌としては、次の歌々がある。「くちなしの色に（心を）染める」というような内容は当時好まれ一般的であつたと思われるが、どれも『古今和歌六帖』三五〇ほどには当該連歌との近さはない。

人のゆるさぬ中にやありけん、をとこ

そめて思ふ色はふかきをくちなしのいはれぬ色と人やみるらん〔『信明集』九八〕

むつまじき人のめの、をかしとおもふにはねむとて

心をばそめてひさしくなりぬれどいはおもふぞくちなしにして〔重之集〕五一）
おもふともこふともいはじくちなしのいろにころもをそめてこそきめ

〔古今和歌六帖〕くちなし 三五〇八／〔続古今和歌集〕恋歌一 一〇〇九

(11) 拙稿「和歌と絵画の邂逅―源俊頼の歌絵の歌」〔解釈と鑑賞〕七三二―二二、平成二十年十二月）

(12) 住の江の浪にはあらねどよとよと心に君によせわたるかな

〔後撰和歌集〕恋二 六三八 つらゆき／〔新撰和歌〕恋 雑 二二三／〔貫之集〕六二四

延喜十二年十二月春立つあしたに、さだかたの左衛門督のないしのかみに賀たてまつれる時のうた

住のえの松の煙はよとよとに波のなかにぞかよふべらなる〔貫之集〕七〇三／〔古今和歌六帖〕けぶり七九四

俊頼の付句は、右の貫之の歌々にも学んだ可能性が考えられる。だが、この二首は作者が共通し、いずれも賀の様相が見られるので、この場合は「型」を学んだとすべきか、通常の本歌取りとすべきかは判断の難しいところである。

(13) 前の中宮に、連歌といふ女房にしのびて右中弁伊家もの申すと聞えけるが、ほどなくおともせずとききて、

ふぢなみといふ人のしける

まことにや連歌をしてはおともせぬ

右中弁のゆづりてつけよと申ししかば

一はしもやどにすゑつけよかし〔散木奇歌集〕一五九八

こちらの連歌でも、前句の結びの形は些か異なるものの、「まことにや」と詠み出して提示した謎を、付句で解くという形をとっている。

(14) 人人恋の歌よませ侍りけるに 摂政左大臣

あやしくもわがみやまぎのもゆるかなおもひは人につけてしものそ

【金葉和歌集(三奏本)】恋下 四五〇／【詞歌和歌集】恋上 一八七 関白前太政大臣／【後葉和歌集】二九七

そでのしづくもみぐるしうひきかくされて

あやしくもあらはれぬべきたもかなしのびねにのみぬらすと思ふに【相模集】一一八

あやしくもところたがへに見ゆるかなみかはにさけるしもつけのはな【綺語集】二九六／【色葉和難集】八七〇

あやしくもぬれまさるかなかすが野のみかさの山はさしてゆけども

【宇津保物語】二藤はらの君 三三二 かの右大将殿(兼雅)

これらのように、実方活躍期以降の勅撰集や個別の家集の他、物語や歌論・歌学書の類に入れられる歌にも「あやしくもゝかな」という句は用いられており、平安全期を通じて一般性の高い句の形であったと考えられる。

(15) ものへまかりけるに、人の家にをみなへしうゑたりけるを見てよめる

兼覽王

をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたるやどにひとりたてれば

【古今和歌集】秋歌上 二三七／【古今和歌六帖】をみなへし 三六六四 かねみの大君

人のをさなきはらばらのこどもにもきせかうぶりせさせはかまきせなどしはべりけるにかはらけとりて

源重之

いろいろにあまたちとせのみゆるかなこまつがはらにたづやむれある

【後拾遺和歌集】賀 四四七／【重之集】一四七／【宝物集】六六

これらのほか、「見ゆるかな」という句を用いた和歌は平安期を通じて百首を超え、頻出の句であると言えよう。

(16) 殿下にて、卯花をよめる

卯の花の身のしらがともみゆるかないづのかきねも俊頼にけり〔散木奇歌集〕二〇〇)

この他、【散木奇歌集】四三三・九五三・一二八六・一二九四・一四〇一に「見ゆるかな」という句が見られる。

(17) 竹鼻續【今鏡(上)全注釈】(講談社学術文庫、昭和五十九年三月)

【今鏡】の記述は後代のものだが、【俊頼髓脳】に俊頼自身のことではないものの、

「良暹、さりぬべからむ連歌など、して参らせよ」と、人々申されければ、さる者にて、もし、さやうのこともあるとて、まうけたりけるにや、聞きけるままに、程もなく、かたはらの僧にもいひければ、その僧、ことごとしく歩みよりて、

「もみち葉のこがれてみゆるみふねかな

と、申し侍るなり」と申しかけて、帰りぬ。(【俊頼髓脳】)

というように兼日で連歌の用意をした場合があったことが述べられている。

(18) 岡崎真紀子「和歌の動態―俊頼髓脳―所収和歌の本文をめぐって―」(「やまとことば表現論 源俊頼へ」笠間

書院、平成二十年十一月)